大阪国際空港就航都市サミット　全体会議（会議録）

日時：平成２４年８月２９日１５時～１７時

場所：千里阪急ホテル（大阪府豊中市）

○淺利豊中市長　　それでは、ただいまから全体会議を開催させて頂きます。

本日、この大阪国際空港就航都市サミットの全体会議には、大阪国際空港と就航先空港の地元１７自治体の首長の皆さん、または代理の方にご参加を頂いております。

この後、全体会議といたしまして、就航路線を介した都市間交流や空港を活かしたまちづくりに関する取り組みや考え方などについて、それぞれからご発言を頂き、また、意見交換を頂きます。時間は午後４時４５分までの約１００分間を予定いたしております。

この全体会議は、先ほどご講演を頂きました戸崎先生にコーディネーターとして進行をお願いしております。そして、全体会議が終わりましたら、今日、このサミットに集う豊中市を含めた１８自治体の共通の思い、決意を示すものとしてサミット宣言を採択したいと考えております。

限られた時間の中、大変恐縮でございますが、会議の円滑な進行にご協力をお願いいたします。

それでは全体会議を始めます。戸崎先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○戸崎教授　　戸崎でございます。よろしくお願いいたします。

全体会議の進め方ですが、ただいま市長からの説明がありましたとおり、最初に、今、ご出席されております１８自治体の首長さん方から、就航路線を介した都市間交流と空港を活かしたまちづくりをテーマにご発言を頂きます。皆様からご発言を頂くため、大変恐縮なんですが、持ち時間をそれぞれ３分程度ということで、発言順は私から指名させて頂きますので、ご了承頂きたいというふうに存じます。

なお、発言の際には、まず、自治体名とお名前をお願いしたいと思います。

また、途中で何度か、豊中市の淺利市長さんからコメントを頂きたいと思っておりますので、その点またご了承ください。全員からご発言を頂いた後、進行状況にもよりますけれども、できましたら意見交換の時間を幾らかでも持てたら幸いだと考えております。

では、早速進めていきたいと思いますが、最初に、須賀川市さんからご発言をお願いしたいと思っています。よろしくお願いします。

○橋本須賀川市長　　福島県須賀川市長の橋本でございます。

まず、発言をさせて頂く前に、昨年の東日本大震災に際しまして、当市も大変甚大な被害を受けてしまいました。その際に、豊中市さんをはじめ、ご来場の皆様にも大変なご支援、ご協力を頂きましたこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げたいと思います。

その地震の被害だけではなくて、原発事故の影響、風評被害を含めて、いまだに苦しんでいる状況にはあるわけですが、今年、復興元年という福島県の位置づけをもって、私どもの自治体も、この空港を活かしたまちづくりを推進してきた立場として本日のサミットに参加をさせて頂きました。ぜひ、この機会を大いに活かしてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

私どもの福島空港でありますけれども、お隣の玉川村さんにまたがる地域に立地をいたしております。先ほど、当市が甚大な被害を受けたと申し上げましたけれども、この福島空港が位置しております阿武隈地域という地域は、今、もう既に議論が風化しているような気がいたしますけれども、首都機能移転の最もすぐれた候補地として選定された地域でもあります。したがって、その地盤の強固さゆえに、全く地震の影響を受けずに、この防災上の機能が果たせたということが、今回改めて福島空港の立地の、いわゆるポテンシャルの高さというのを地元の私たちも強く感じているところ

であります。

特に私からは、まちづくりに活かしていくだけではなくて、今回、大震災によって大きな被災をした地域だからこそ、この空港というものの位置づけを防災上の拠点として明確に位置付けるべきだろうというふうに強く感じているところであります。現実には、高速道路や鉄道が寸断された状況の中で、空の輸送が唯一、人員、あるいは支援物資等の輸送ができる状況にあったわけでありますが、本当にそういう意味では、この空港の果たした役割というのが、大変大きかったと感じております。

実は震災以前に、豊中市さんから交流の意見交換をさせて頂けないかというお話を頂いておりました。そんな中で被災をして、もう意見交換前にご支援を頂くという状況でもあったわけでありますが、本市にとっては大変ありがたいお話でもありました。また、原発事故の影響が風評被害を含めて大変大きい中、大阪国際空港内で、様々な物販等の安全性についてのアピールをさせて頂くなど、大きなご支援を頂きました。

先ほど、戸崎先生のご講演の中でもありましたけれども、マスコミのイメージというのが大変大きなインパクトを持ち過ぎています。実は福島空港は、この大阪路線と、現在、北海道の新千歳に路線を持っておりますけれども、そのほかに国際定期路線が、上海とソウルにございました。残念ながら震災以降、その国際定期路線は運休状態にあります。恐らくは、福島県の情報として提供される映像で、白い防護服を着て、ガイガーカウンターを持った姿が配信されてしまっている、いわゆるネガティブな情報だけが受け止められてしまっているということが、いまだにあるんだろう思っております。

現在、皆さんも誤解をされている方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちの地域のうち一部避難区域で作業されている方々はそのような状況にあるわけですけれども、私どもの市域にあっては、そのような線量の地域はございません。その風評被害をいかに払拭するかと、もっと前向きな取り組みを現在進めている中でもありますので、その点を十分ご理解を頂いて、今後ともご支援を頂ければと思っております。

今回、こういうサミットを開催頂いたことを大変ありがたく思っておりますし、今後とも、その風評被害、そして空港の利活用合わせて、交流を深めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

続きまして、岩沼市さん、よろしくお願いいたします。

○菊地岩沼市副市長　　宮城県岩沼市の副市長の菊地でございます。

仙台空港を拠点にまちづくりを行っております。昨年は３．１１の大震災がありました。仙台空港を災害時の拠点として位置づけておりましたので、付近の住民は、所定の避難所へ移動するまでの３日間を空港内で過ごしました。

震災から間もなく１年半になろうとしていますが、被災者の方々はまだほとんど変わりない状態でございます。これから自分の生活を自立していくということで、それぞれ頑張っているところでございます。まずもって、全国から多大なるご支援を頂きましたことに、本当に感謝を申し上げます。

仙台空港は、大体海岸から１キロぐらいの位置にございます。３月１１日には、海岸から１０メートルを越す津波が押し寄せまして、空港に到達した時点で大体３メートルを超えているというような状態で、１階の部分は水没したということでございます。

岩沼市の空港周辺につきましては、海抜が０～２メートルと、ほとんど高台がない状態でございます。したがいまして、空港を避難所に指定しておりました。当日、地域の方は地震が発生してすぐに空港の方に避難をしました。ですが、地震発生から津波が押し寄せるまで、１時間１０分ぐらいあったものですから、戻った方もおいでになりました。そういった方が、厳しい状況に遭ったわけです。

空港のそばに特別養護老人ホームやデイサービスセンターがありました。

これらは海から２００メートルぐらいの位置にありました。そこの施設を利用していた約１００人の方々は、地震直後、空港に車でピストン輸送しまして、一人も犠牲者が出ませんでした。空港に行ってからは、先に避難をされた方々に手助けをしてもらい、階上に上げて頂いたことで全員助かったということです。奇跡的と言われているところでございます。海岸沿いには高い建物はなく空港以外に逃げ道がなかったという状況でございました。当日は、１，６００人ほど空港に避難をされましたが、３メートルぐらいの水かさがありましたので、完全に水没し孤立しまして、外部と遮断された状態が２日半続きました。電源もなく、電話も通じない状況で全然連絡がつかない状態でした。あらゆる通信手段がないという中で、食事は空港ビル内の商品、例えばかまぼことか、お菓子とか、そういうお土産品で食いつなぎ３日間過ごしたということです。

岩沼市と隣の名取市と、隣接する住民の方々がそこに避難されていましたので、一緒になって寒さと飢えを凌いだということを後々教えて頂きました。一番困ったのは汚物臭が酷いトイレだったようです。それから、当日は大変寒うございました。なかなか、寒さ対策もできないままに、ダンボールなり、身近にあるものを体に巻きつけて寒さを凌いだということで、命が助かっただけでも非常に喜んだ状態でございます。

３日目に空港から一人脱出してきた方から、滑走路を西側に走って出てきたという情報を得て、すぐに避難している方々のパンや食事を用意して、空港ビルに届けたのですが、それまでは本当に恐怖の２日半だったというお話を伺っております。

我々は空港周辺の工業団地化を進めております。約２００社、そこに関連企業が入っていますが、当然そこの企業も被災したわけです。水が入りまして、ほとんど機能しない状態になりました。約２００社のうち、２割の方は再建を諦めたというような状況でありました。それを今後どのように再建していくかというのも我々の課題でございます。その工業団地に約５，０００人ほどの雇用がありました。そのうち、１，２００人分ほどは、もう既に失われた状態でございまして、これからどのようにして

空港と工業団地の安全性、雇用を確保していくか。そういったものを手掛けていきたいと思っております。

まだまだ、復興は道半ばです。全力疾走で取り組んでいますので、ぜひ、これからもご支援頂き、そして、空港中心にまちづくりを進めていきますので、どうぞ、ネットワークを強化させて頂きまして、ご支援頂きますようお願いいたします。

以上でございます。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

続きまして、益田市さんの方からお願いいたします。

○山本益田市長　　島根県の一番西の端っこの、もうじき山口県というところから参りました山本浩章と申します。この８月２日に市長に就任したばかりのなりたてでございます。

益田市という町は人口５万人の小さな町なんですけれども、町の自慢は高津川という川です。昨年度の国土交通省の調査で水質日本一に輝きまして、これで２年連続、過去６年の間に４回目という、非常に美しい川が流れています。それから、柿本人麻呂、これは万葉時代の歌の歌聖ですね。さらに、雪舟のゆかりのお庭があったりする文化と芸術の町でして、「グラントワ」という劇場と美術館が一緒になった施設もあるというのが自慢でございます。

一方では、島根県の一番端と申し上げましたけれども、鉄道網ですとか、道路網の整備が遅れておりまして、交通の不便さというのに悩んでいるところでございます。そんな中で航空路線が辛うじてあるという、命綱としてつながっております。現在の便数は、東京便が１日１往復。そして、大阪便も以前は定期便があったのですけれども、今は夏の間だけ、７月の半ばから８月いっぱいまで季節運航がされております。そして、その空港を利用しながら、産業の振興と交流人口の拡大、地域の活性化につ

なげていきたいと考えているところでございます。

現在、益田市は、幾つかの日本国内の都市、また国外の都市とも交流をしております。主に文化交流、スポーツ交流が盛んであります。益田市としては、現在の友好都市との交流を拡大しながら、一方では今回のサミットを機会に、この大阪国際空港、もしくは羽田空港と結んで、間接的に路線がつながっている都市とも交流を行いたいと思っております。空港は空の玄関口と言われますように、いろいろな地域から人とか情報が入ってくる入口でございますので、この入口を積極的に利用してまちづくりを進めていきたいと考えております。

そんな中で、益田市におきまして、毎年行っている行事がございます。それは、「萩・石見空港マラソン全国大会」というマラソン大会でして、日本で唯一滑走路をマラソンコースとして走るというこの大会を１０月の第３日曜日、今年は１０月２１日になりますけれども、開催しております。公認のハーフマラソンコースということで、市外からもたくさんの人が参加されます。ぜひとも、お越し頂ければと思います。

この空港を利用しながら、益田市の魅力の発信をしていく。そして、空港の存在と航空路線を活かした取組みを行うことによって、交流人口の拡大をさらに図ってまいりたいと考えているところでございます。

以上です。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、益城町さん、お願いします。

○古閑森益城町副町長　　熊本県の益城町副町長の古閑森です。

益城町は熊本市の東部に隣接しておりまして、また、「阿蘇くまもと空港」は、後ほどご発言があります菊陽町さんが滑走路のほとんどを持っておられまして、益城町はターミナルビルがあるところです。

熊本県の場合、九州の中央に位置するという特性を活かし、九州におけるビジネスや観光の拠点となることができると思います。その際の交通手段として、航空機は非常に重要なものになると思います。

そこで、空港の交通手段としての重要性を高めるためには、空港へのアクセス強化が必要と考えます。阿蘇熊本空港は、市街地から離れたところにありまして、空港周辺には何もないという状況です。あわせて、空港と市街地や駅、観光地など、目的地を結ぶ手段は、現在のところ自動車もしくは空港リムジンバスなど、数系統のバスしかございません。町としましては、利用者の利便性をさらに向上させ、航空機の利用を促進させるためにも、空港へのアクセス強化と空港周辺の活性化が必要であると考えます。

熊本県においては、九州の観光拠点化や、九州の州都をにらんだ構想づくりなどを進められるようです。これに合わせ、町としても、航空機の交通手段としての重要性とともに、空港を活かしたまちづくりを進めてまいりたいと考えております。

以上です。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

続いてまいりたいと思いますが、北秋田市さん、よろしくお願いいたします。

○虻川北秋田市副市長　　北秋田市副市長の虻川と申します。

大館能代空港というところでございますが、秋田県の北部でございます。大館市と能代市のちょうど中間に北秋田市というのがございまして、空港までは、市役所から、繁華街から、まず、車で１０分ぐらいというように、非常に利便性の高いところに位置しております。域内には、皆さんご存じかと思いますが、世界遺産の白神山地や十和田八幡平国立公園があるというところでございます。

そして、関西に本社があります誘致工場が多く点在しておるわけでございますが、

残念ながら２３年の１月に大阪便が運休の状態に入り、今、休止になっているということでございまして、今回の一番の目的は、何とかこの大阪と北秋田の航空便をもう一度、皆さんのお力をお借りして復活できないのかなと考えておったところでございます。これに輪を掛けて、ＪＲさんが日本海という寝台特急を廃止しちゃいまして、私らの地域から大阪まで直接来る手段がなくなったということでございます。ここはぜひ、今日ご出席の皆様と一緒に力を合わせて、何とか大館能代空港の便を復活させたいということで考えておりました。

最近、北秋田市では、バター餅というのが非常に全国的に話題になっておりますが、これを大阪まで持ってくる手段が今のところないということで、これは路線をぜひ復活させて、おいしいバター餅を皆さんにお届けしたいと思います。また、クマ問題でいろいろ、今、北秋田市、受け入れということで頑張っておりました。そういった意味で、自然豊かなところに皆さんにぜひおいで頂きたいと思います。それから、震災の時に秋田県第２の空港ということで、荷物やら人の受け入れを大いにさせて頂き、少しでも被災地の方々への力になれたのかなと自負しているところでございます。

秋田弁でなまって、大変お聞き苦しいかと思いますが、ひとつ皆さんのお力をお借りして、運休の路線を復活させたいということでございます。ぜひ、よろしくお願いします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

極めて具体的な発言をして頂いて、ありがたいと思います。では、続きまして、奄美市さんからお願いしたいと思います。

○朝山奄美市長　　奄美市の朝山と申します。

このようなサミットを企画運営して頂きました豊中市淺利市長様に、そしてまた、関係者の皆様方に、まずもってお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございま

す。

さて、奄美市と申しましても、ご存じない方が残念ながらたくさんいらっしゃるんです。まだ、全国には。鹿児島県と沖縄県のちょうど中間に位置する、大きくは５つの島から成り立っている奄美群島であります。その中で、１市１１町村ございます。奄美市は、いわば、群島という形で奄美市を形成いたしております。平成１８年３月２０日に市町村合併をいたしました。その人口が約４万９，０００人でございましたが、辺地のご多分に漏れず、年々人口が減ってきております。そういう状況の中で、奄美は奄美群島振興開発特別措置法という国の特別の法を頂いております。離島振興法、そして小笠原と同様の法律を背負っております。その中で大きく位置付けておりますことが、観光、人口交流ということでございます。

外海離島でありますゆえ、一度の台風が発生いたしますと、飛行機はもちろん就航いたしません。船も前後１週間は途絶えてしまいます。したがって、幾ばくかの自給率はありますものの、生鮮食料品などは船に頼って運んでくるということから、大変、災害に弱い外海離島の地でございます。それだけに、航空路線というのは、私どもの生活路線であり、また経済路線でもございます。いやが上にも、航空路線はなくてはならない、または死守をしてまいらなければならない地域でもございます。

なかんずく、大阪国際空港近辺、この関西近郊には奄美出身者が３０万余いると言われております。奄美全体の人口が１２万でありますから、その３倍近くがこの近畿関西地域に住んでいらっしゃいます。全ての皆様方にこの空港を利用して頂いております。以前、関西国際空港が開港となりましたときに、奄美と関西国際空港との路線でありました。この近郊に住んでいらっしゃる皆さんが不便であるということから、豊中市さん、伊丹市さん、そして経済界の皆さん、同時に奄美出身者の皆さん、我々地元と一緒になって、どうしても利便上、この大阪国際空港でなければいけないという猛烈な運動をいたしまして、現在、大阪国際空港さんとこのような形でお付合いをさせて頂いております。

来年が就航４０年という大きな節目の年になります。そのような機会を通し、また、このようなサミットの機会を通して、お互いの交流を深め、空港を利用した経済の活性化、また人口の増加、雇用の創出、観光交流等々を含めて、経済的にもこのサミットを活かしていければと、非常に、切に願っている辺地の外界離島の市でございます。どうか皆様方、奄美群島はそのような地域にございますが、大阪直行便、約２時間、羽田空港と直行便、約２時間半という地域に置かれております。どうぞお越し頂きたいと存じます。

少しＰＲをさせて頂きますと、今、奄美群島の生態系は、世界に類例のない生態系を施していると。動物、植物、奄美地域にしかいないアマミノクロウサギやオオトラツグミ、オットンガエルなど、いろんな生態系が希少種であると言われておりまして、この自然を守っていこう、ユネスコの自然遺産に登録しようという動きが環境省、特に県、また地元においてにわかに活発化いたしております。そのようなことを活かしながら、点在する小さな観光資源を線で結びながら、全国に発信できるように、一生懸命努力をしていきたいと考えている地域でございます。どうかお見知り置き頂きまして、我々もこのサミットを通し、皆さんと連携を深めながら、地域間交流を高めて、奄美の経済の振興、また人心の安定に努めてまいりたいと考えておりますので、どうかご理解を頂きたいと存じます。よろしくお願いいたします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

ちょっと、ここで一回まとめてみたいと思いますが、今までのお話の中で、台風も含めてですが、空港の防災拠点としての位置付け、特に今回の３．１１の大災害が与えた空港の見直しというのが非常に重要だと思います。

そして、交通手段としての重要性ですね。空港がないと、先ほどおっしゃったように、これがないと生活できないというところがあるので、そういったところをどう考えるか。あるいは、そういった中で就航路線をどういうふうに確保していくかという、

そういったご発言があったかと思いますけれども、こうした観点について、淺利市長の方から、ぜひ一言ご発言を頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

○淺利豊中市長　　それでは、私の方から２点、関連のある報告をさせて頂きます。

まず、平成７年に発生した阪神・淡路大震災についてですが、特に伊丹市、豊中市は大きな被害を受けました。その際に、ちょうど両市の間にあります大阪国際空港は利用することができまして、多くのところから物資や支援を頂いた。こういう経験がございました。

昨年の３月１１日の後、本市市議会で、空港を活用して、支援できることはやらなあかんのと違うか、という議論がございました。そういった議論の中で、ＪＡＬさんやＡＮＡさんともお話をさせて頂いて、「分かりました、協力しましょう。」ということで、福島空港がある須賀川市さんなどへ支援物資等々を送らせて頂くことができました。こういった面ではやはり、大阪国際空港のような内陸部の空港というのは、これからも重要だなというように思っております。

もう一点、先ほども、路線の確保の話がありましたが、私も大阪国際空港就航都市を訪問させて頂いて、１日１便というのは、活用するということが時間的に難しいと感じました。１日２便あれば、２４時間もしくは４８時間が有効に使えるということで、お客様にご利用頂くということで言えば、１日１便ではなくて２便あることが、大切なのではないかなということを感じました。

今日は航空会社の方も来られていますので、ぜひその点も含めて、お考え頂ければ大変ありがたいと思っております。

以上でございます。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、続きまして、霧島市さんにご発言を頂きたいと思います。

○前田霧島市長　　霧島の市長でございます。

鹿児島国際空港のあるまちでございます。

私たちの空港は、新幹線が鹿児島まで全線開業した結果、ピーク時で約６１５万の利用者があったんですけれども、現在、平成２３年度の一番新しいデータによりますと、４４６万人に、つまりマイナス１６９万人です。新幹線の全線開業によって減ったということでございますが、手段はともかく鹿児島に来て頂けると考えると、おおむね、約６００万人の南九州のへその位置にあって、人口結接点かなと、こういう前提があります。

そういう中で、お互いにこうして、全国の空港を持つ所在都市が集まったわけでございますが、私はネットワークをどう活かすか、それが一番問い掛けられていると思うんです。

具体的に申し上げます。一つには、私たちは平成２２年９月に、仙台空港を含む全国の７都市と、大規模災害等発生時において、ピンポイントで結ばれている都市どうし、空港を持っている強みで助け合おうじゃないかという防災協定を結んでおりました。まさかそれから半年後に東日本大震災が来るとはお互い夢にも思っていなかったわけですが、現実にそれは起こりました。私どものまちからはその協定によって、名取市に２７回にわたって市職員７１名を派遣して応援をさせて頂き、遠く仙台空港と南九州の鹿児島空港が、空港を持つまちどうしの連携を見事に取って助け合ったという事実があります。そういう意味では、私たちのネットワークは絶対に活かしていくべきだと思います。

そして、次に僕が言いたいことは、この魅力ある空港づくり、あるいはまちづくり、そういうものはお互いに、一つひとつお互いの空港で、あるいはお互いのまちでやらざるを得ない。それをどのようにしてお互いが具体的にこのネットワークを、今みたいな災害協定等々で活かしていくかということが問われている。しからば、どのよう

な魅力ある空港づくりを地元の空港所在都市として、県や国を突き動かしながら、どうつくっていくか。僕は３つ観点があると思います。

地域の特性のある空港をお互いに目指すべきじゃないかという点がひとつ。もうひとつは周辺地域、そして私どもでいうと鹿児島県全体、あるいはまた熊本県、宮崎県の南部地域、その南九州全体の地区民が、飛行機には乗らないけれども空港に行く、アミューズメントみたいな機能をしっかり持たせる。ですから、地域の住民が立ち寄りたくなるような空港、そういうことがもうひとつ言えるのかなと思います。空港の概念を超えた空港をつくれと言いたい、というのが２点目です。

３点目に、各種交通機関、そういうものの結接点機能、これをお互いに徹底して機能強化を図らなければ、その空港は活かし切れない、という点が言えるのかなと思います。じゃあ、我々のまちがどうしているのかということを申し上げたい。

鹿児島空港は、ちょうど開港して今年が４０年目です。そして、他のまちに空港があるんじゃなくて、我がまちにある、その有利性を活かすという意味で、４０年間、空港よありがとう、という意味を含めまして、私はこの４月１日から来年の３月３１日までの間に、新たにパスポートを取った市民に対して、２，０００円の補助を出すようにしました。私たちの空港からはソウル、上海、台北と３つの海外路線の定期路線があります。これは週２便、３便体制ですが、願わくば県としっかり組んで、これを毎日運航にしっかりと持ち込んでいきたい。そのために具体策を自治体としてもしっかり打ち出していかなければならない。ただ、概念で仲良くしましょう、そんな仲良しごっこを幾らやったってしょうがない。ですから、しっかりと具体的に、例えば、空港のあるまちは、国際線を持つまちは特に、パスポートの取得に対して、お互い日本一の取得率を誇るような、そういう具体策を編み出したらいいんですよ。具体的に我々の地域でしたら、うちが恐らくトップでやらせて頂きました。

もうひとつは、県が３つの海外定期路線、これの利用促進を図る策として、例えば６人以上行ったら５万円差し上げて、乾杯代とか何かに使ってくださいというような

利用促進策を打ち出して、せっかく取った海外路線や国内路線、特に海外路線を失わないための努力は続いています。それを我がまちは、県が出す半額を上乗せして、さらにこれを利用促進させようというような策を、この４月１日から来年の３月３１日まで、４０周年のお祝い事業として特別に提案をして、議会に認めてもらい、それを今実行しているところです。パスポートの取得については、もう右肩上がりで、どんどん取っております。１２歳以下の子供が５年ものを取ったら６，０００円掛かるわけですからね。これを２，０００円うちが出すんですよ。今のうち、すぐに海外旅行の計画がなくても取っておけということで、取得率はどんどん上がっていますよ。

また、もうひとつは、この１０月１日からでございますが、空港があってもそこを活かし切らなきゃ何にもならん、そういう意味で、私は空港ビルと直談判をしまして、空港ビルの中に我がまちのＰＲコーナーをつくって頂いた。そしてここを全国、あるいはアジアに対する情報発信基地にしようということで相談をしました。空港所在都市ですから、当たり前の努力ですけれども、そこに県の観光連盟、そして県の特産品協会、これらの方々と組んで、我がまちが空港所在都市としてやるべきことを具体的にやって。４０年目にして初めて、ドーンとそういうものが出てくるということです。

だからお互い、空港所在都市の単なる、ふわふわした概念だけじゃなくて、具体策をどう打ち出すか、それが全員に問われていると僕は思っています。

以上、言い出せば切りがないからこれで終わります。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

ぜひ、具体策をどんどん出して頂いて、このサミットで共有させて頂くというような形にできれば、ありがたいと思っております。

それでは、続きまして、玉川村さんからご発言をお願いしたいと思っています。

○石森玉川村村長　　福島県玉川村の村長の石森でございます。よろしくお願いします。

まず、先ほど、お隣の須賀川市さんがお話ししましたけれども、福島県は３月１１日以降、多くの自治体の皆さんに色々とご支援を頂いておりまして、改めてこの場をお借りしまして、まず皆さんに感謝を申し上げたいと思います。

福島空港でございますけれども、福島県は、北海道、岩手県に次いで、大きな面積を有する土地でございまして、福島空港は、その中央よりやや南側に位置します。３月１１日には、先ほど須賀川市さんがお話しされましたように、びくともしませんでした。就航先としまして、現在は大阪国際空港に毎日５便、あと、新千歳に２便でございます。平成５年３月に開港いたしまして、一番多い時で平成１１年度なんですけれども、７６万人の利用客がございました。現在は、震災以降、ソウル、上海の国際定期路線が停止しているというような関係もあって、２０万人まで落ちてきているような状況であります。大変苦戦をしている福島空港でございます。そういう中にあって、何とかして福島空港を利用、あるいは活用して促進していきたいということで、福島空港を活かした地域づくり研究会なるものを作りながら頑張っているところでございますけれども、ＪＡＬさんが撤退いたしまして、ぐんと利用者が減りました。と同時に、空港ビルにテナントとして入っておりました飲食・物販関係も少なくなってきました。それに合わせまして、玉川村では、福島空港の西側２キロメートルに生産物直売所、道の駅の指定を受けておりますけれども、物販関係をしている部署がありまして、その分店ということで、空港ビルの中に約１０平方メートルぐらいのスペースをを借り、「空の駅」として何とか利活用促進に貢献しましょうということでやってきました。

話は前に戻りますが、福島空港には無料の広い駐車場がございますが、昨年の震災の時には一部の県民の方が避難先として空港を利用されました。福島空港から初めて羽田空港に毎日飛んでおりまして、その利用、あるいはその避難先としての利用で、開港してからこんなに福島空港に人がいるのは初めて見たというのが、去年の３月１１、１２、１３の３日間でありました。こんなに、東京便であっても利用する人が

たくさんいました。茨城空港や仙台空港が使えなくなったというような、そういう大きな要因がございましたけれども、これだけ利用者がいるんだから、やっぱり福島空港をもっともっと促進、あるいは利用に貢献しなければならないということで頑張っているところでございます。

原発の風評被害のお話を先ほど須賀川市さんがされました。福島県を一緒くたに福島ということで皆さんに見られておりますが、福島県は大きな面積でありまして、福島空港は線量的には大変低い場所に位置しております。

そういう中で、福島空港の利用者が減っているということがあったり、あるいは、福島県では今、子どもたちが外に出て伸び伸びと遊ぶことができないような地域もございます。福島県では、そのために屋内遊び場の設置をしている自治体があるんですけれども、玉川村では空港ビルの３階部分を賃貸いたしまして、１０月２６日オープンを目指して、屋内遊び場を設置しようということで、今、進めています。中身的には、天幕やヨーロッパの遊具等を設置するんですけれども、約２，０００万円ほどします。小さい玉川村にとっては非常に大きな金額でございますけれども、これらの負担をしながら、ぜひ、村の子どもたちもさることながら、近隣の子どもさん、あるいは親御さんに来て頂く、そして福島空港の利活用促進につながればということで、計画をしているところでございます。

今回、サミットを通して、地方空港がいかにして生き残れるか、そういうような部分を皆さんと共に研究し、模索しながら頑張ってまいりたいと思っておるところでございます。豊中市さんをはじめ、関係機関、団体の皆さんにこういう機会を作って頂きまして、本当にありがたく思っているところでございます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げたいと思います。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、大田区さん、お願いします。

○川野大田区空港担当部長　　皆さん、こんにちは。大田区空港担当部長の川野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

大田区は、京浜工業地帯の一角をなす高度なものづくり産業が集積しているものづくりのまちでございます。ＮＨＫの朝の連続テレビ小説「梅ちゃん先生」の舞台となった蒲田があるまちも大田区でございます。蒲田は、ちなみに今、夜は「梅ちゃんサワー」がすごく人気でございます。

羽田空港についてでございますが、先ほど先生からお話がありました再拡張・国際化によりまして、平成２２年から徐々に発着容量、国際線の就航先の拡大がされているところでございます。現在の年間発着容量は３９万回、これが２５年度末には、４４．７万回まで拡大されます。年間の利用客数で言いますと２３年でございますが、国内国際線合わせまして、６，２００万強でございます。これは世界の主要空港の中で５番目の数字でございます。また国際線の利用者数は７２５万人ということで、こういった空港が持っているポテンシャルを大田区はもちろんでございますが、首都圏、それから日本の発展に活用していきたい、そういう思いがございます。

空港に隣接する沖合展開によって生じた空港跡地についてでございますが、そこに国内、国外に開かれた広域的な産業ネットワークの拠点、産業交流施設を計画しているところでございます。この跡地自体は、今、国の国際戦略総合特区、これは都が国に申請しているんですけど、「アジアヘッドクォーター特区構想」の中の一部に区域指定をしているところでございます。特区自体は、外国企業の業務、それから研究の統括拠点を誘致して、それらと国内企業の連携によって日本の経済を再生していこうと、日本全体の成長を牽引していこうというものでございます。

日本はたくさん高度な技術を持っています。先ほど大阪国際空港に降り立った時に、周辺の町を回ってきましたけれども、やはり基盤技術が非常に集積していると。羽田空港の跡地に予定しております産業交流施設では、そういった高度のものづくり基盤

の集積を活かして、国内はもちろん、アジアをはじめとする海外企業との交流、技術連携、取引などにつなげて、日本のものづくりの国際競争力、あるいは雇用増加による地域の活性化に結びつけたいと考えているところでございます。

具体的には、国内企業間はもちろん、海外企業と日本企業とのマッチング、取引拡大、市場拡大、それから、国内中小企業等が有する独自技術ですとか、新たに創出されるような技術についての紹介、あるいは展示会の開催、国内産業集積間の連携などでございます。

大田区長の思いなんですけれども、国内企業はもちろん、国内企業と外国企業の連携、交流を深めるための、平成の出島にしたいというような思いを区長は持ってございます。

羽田空港につきましては、国内４８都市、それからアジアを始めとする世界の各都市とのネットワークを活かした取り組みが可能でございます。本サミットを契機といたしまして、都市間交流を深め、空港を活かした地域や産業の活性化に結びつけていければというふうに考えてございます。

私からは以上でございます。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、秋田市さん、お願いいたします。

○土田秋田市都市整備部長　　秋田市長の代理の土田と申します。よろしくお願いします。

羽田空港さんの後で、秋田空港のようなローカル空港の話をするのは、数字的にも全然違いますが、秋田空港は昨年開港３０周年を迎えまして、利用客が累計で３，０００万人以上となっており、着実に、少しずつ増えていくという状況にあります。これは秋田が地理的に、新幹線を使っても東京から４時間掛かることや、先ほど北秋

田市さんがお話しされたように、大阪からは直通のＪＲがないということもありまして、航空機に頼っている部分がかなり多いと思います。

そういうことで、就航先は大阪国際空港、羽田、中部、新千歳となっております。また、国際定期便であるソウル便ですけれども、３．１１以降、韓国の方に来て頂けない状況です。しかし、円高の影響もありまして、搭乗率が７８％で、７０％以上は確保しているという状態でございます。

秋田空港は、秋田市中心部から車で４０分ほどの郊外空港でございますが、アクセスにつきましては、大駐車場を持っている関係で、地元住民は車での利用がほとんどとなっております。しかしながら、リムジンバスは各便に合わせて走っており、その他に、これは前日までの予約が必要ですけれども、乗り合いタクシーがございます。通常４０分間走ると１万円ぐらい掛かると思いますが、市内中心部まで１，３００円という安価な料金で行けるため、隠れた人気となっております。

周辺の開発につきましては、３０年前にできた空港ですので、それにあわせて徐々に開発をしていきました。空港まで約７キロの距離に高台がございまして、１４０ヘクタールの工業団地が既に完成し、大規模企業、地元企業、それから誘致企業等でにぎわっております。また、その隣接地にニュータウンをつくりまして、ここには２，２００から２，３００世帯が居住し、小学校、中学校等も開校しております。物流面で良好な地域特性でございますので、今後も企業誘致に努めていきたいと思ってはいますが、なかなか今こういう経済情勢ですので、新規については苦戦しております。

また、本市では、成長戦略のひとつとしまして、観光秋田維新ということで、交流人口の増加によります地域の活性化と経済波及効果を期待できる観光分野の振興を県とともに図ろうとしております。秋田空港を一つの核として、他都市との交流、具体的には、就航相手都市相互の観光などのＰＲ、または共催イベントの実施、それぞれの市民の相互訪問ツアーへのバックアップなど、具体的協力関係を結べたら非常にい

いのではないかと考えております。

そういう意味でも、今回の大阪国際空港就航都市サミットは、非常に有意義に感じております。大変ありがとうございます。

また、大震災についてですが、秋田は人的被害がゼロですし、物的被害もほとんどございませんでした。その関係で、秋田空港・秋田港は、震災直後から太平洋岸の代替を果たしておりまして、非常にその効果が高かったと感じております。そういうことから、様々な災害に備え、太平洋側、日本海側、関西、東北など、大規模災害の影響を一緒には受けにくい地域による相互補完機能構築によって、産業活性化に資していければと思っております。もちろんこれは、お互いにウイン・ウインの関係を築いていきながら進めていければと思っております。

最後に秋田市のＰＲをさせて頂きたいのですが、秋田市には２５０年以上前から秋田の夜空を照らす竿灯まつりがございます。今年は８月３日から６日ということで終わっていますが、観光資源はどこの地方にもあるもので、秋田にもたくさんございます。特にこの竿灯まつりにつきましては、関東、東海圏までのお客様にたくさんいらっしゃって頂いておりますけれども、関西圏のお客様については、まだまだ私どものＰＲ不足のせいか、すこし少ないと考えておりますので、このサミットを契機に、一層魅力を売り込みまして、皆さんにおいで頂ければと思っております。大変ありがとうございます。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、名取市さん、お願いいたします。

○佐々木名取市市長　　宮城県の名取市長の佐々木一十郎と申します。お手元の参加都市要覧の１０ページが名取市でございます。

名取市は、東北の中心市であります仙台市のすぐ南隣。先ほどお話し頂いた岩沼市

さんとの市境に仙台空港があります。人口７万３，０００人ほどの町でありました。昨年の３月１１日、東日本大震災で、東北の沿岸部の町同様に、名取市も大変な被害に遭っております。市内で９１１人の方がお亡くなりになり、未だ４３人の方が行方不明のままといった状態にあります。

仙台空港も沿岸部にありまして、大変な被害を受けました。空港ビルの２階に地域の方々が多く避難して、旅行客も空港で３日ほど過ごしたというようなことであります。空港ビルというのは便利なもので、レストランはある、売店はある。避難した方々は、そこの食材をみんな提供して頂いて、何とか食いつないだ。もちろん我々も何とか食料を運ぶような努力もしておりましたが。そういったことで、正式な協定は結んでおりませんでしたが、災害の時にはどうぞ空港ビルをお使いくださいね、というようなお話は頂いておりまして、大変に地域の皆さん心強く、空港を使わせて頂きました。

この空港というのは駐車場がたくさんあります。民間の駐車場を含めて、車が空港の周りにたくさんあったのが、みんな津波で流れて、滑走路を塞ぎ、周辺の水田を塞ぎ、そんな状態でありました。空港をいつオープンできるのかとみんな心配をしていた中で、アメリカ軍の方々が、海兵隊が真っ先にやってきて、重機を持ってきて滑走路の車をどけて、あっという間に片付けていったんですね。日本でも同じぐらいのパワーはあるんですけれども、仮に日本でやったとしたら、いちいち車のナンバーを控えて持ち主に連絡して、なんてことをやるでしょうが、米軍が来るとそんなこと一切やらない。重機を持ってきて、ガーっと片っ端から片付けていった。おかげで１カ月足らず、４月１３日には暫定的な運用を開始することができました。正式には７月になってからオープンしましたけれども、１カ月足らずで空港が使えるようにできたということは、アメリカ軍の協力というのが、大変大きなものがありました。

また、自衛隊の方々にも、今回の震災で大活躍をして頂きました。そしてまた全国から、そして世界中から、本当に多くのご支援を頂きました。先ほどお話しされた霧

島市の前田市長も真っ先に電話を掛けてきてくださって、何かお手伝いすることはないか、今、物を運んだからと言って頂きました。霧島の水とか物資とかを送って頂き、職員を派遣して頂き、商工会などから義援金をお届け頂き、本当に多くのご支援を頂きました。

先ほどご紹介があったとおり、全国の民間空港関係市町村の協議会をつくっている中で、お互いに何かあった時に助け合おうねという協定を結んでいたまちの方々から、こういった時に応援を頂いたことに、改めて感謝を申し上げます。また、この協議会の会長をなさっておられます伊丹市長さんにも大変なご支援を頂きました。改めて感謝を申し上げます。

さて、私たちの仙台空港ですが、かつては仙台駅前からバスで５０分ぐらい掛かるという、大変不便な空港の一つでありました。それが、平成１９年に仙台空港アクセス鉄道ということで、ＪＲ東北本線名取駅から仙台空港までの間、７．１キロを鉄路で結びまして、最短で１７分という大変便利な空港になりました。

ただ、鉄道を引くに当たって、仙台空港の利用客だけでは絶対に鉄道の新規の認可が下りない、利用客だけでは収支が合わないというようなこともあって、仙台空港との間に２つ駅を造って、その間にりんくうタウンということで、新たに１８５ヘクタールの街を造ったところであります。この街、本当に売れるのかなと思っていたのですが、今回の震災の後も、ここは津波が来ないからということで、随分売れ続けております。ひょうたんから駒ということでもあったんですが、これまで名取の中では空港というものを迷惑施設としてしか捉えてなかった。うるさい、騒音問題、最近随分静かになったとはいうものの、地域の皆さんは空港を迷惑施設としか捉えていなかった。それが、やっと空港を活かした新たなまちをつくることができた。このことをありがたく思っております。今回の震災も、何とか復興を目指して取り組んでいるところでありますけれども、これからも災害というものを忘れることなく、我々、対処してまいりたいと考えております。

こういった仙台空港でありますが、もう３０年以上になりますけれども、地元の観光協会が市民のつばさというイベントをやっておりまして、市民の方々を募集し、空港を利用した旅行会を開催しております。就航先のまちを中心に旅行プランを立て、交流を年１回ずっと続けておりました。こんなこともこれからも続けていきながら、空港を活かしたまちがどうあるべきなのか。震災復興も絡めて、新たな利用を考えてまいりたいと思っているところであります。

以上です。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

ここでまた小括してみたいと思いますけれども、空港ビルの利用・活用。先ほど空港の概念を超えた空港というのを提示すべきだというご発言もありましたが、いかにそうした新しい利用価値を見出していくのか。今のお話にもあったようなりんくうタウンのような空港周辺の土地活用、あるいは、基調講演では言及しませんでしたけれども、物流拠点といった視点、産業立地など、そういった観点からの空港を活かしたまちづくりについて、どのように考えるべきなのかということに対し、再び、淺利市長の方からご発言をお願いしたいと考えています。

○佐々木名取市長　　先ほど、ご紹介させて頂いたとおり、名取市側では、空港というのはほとんど利用してこなかったというのが現状でありました。南隣の岩沼市さんでは、県の開発で臨空工業団地があります。

ただ、空港を利用した企業を呼び込もうという当初のもくろみであったんですけれども、なぜか来たのは、あの当時の重厚長大型の鉄鋼会社が来たり、これ、どうやって飛行機で運ぶんだというのは随分来ておりまして、そこは結構、流通団地的な機能が随分多く、企業が立地しているようです。我々としては、空港が目の前にあるということで、私たちのまちの工業専用地域に新たな企業を誘致する。関西圏の方々に

話をすると、仙台空港が目の前にあるというだけで、ここは便利だというような選択をして頂いているようなこともあります。これからも、空港をアピールしながら、企業誘致も努めてまいりたいと考えております。

○戸崎早稲田大学教授　　ありがとうございました。

重ねて、淺利市長の方から、コメント頂けますでしょうか。

○淺利豊中市長　　空港ビルの活用ということで、色々と意見がございましたが、全国にある大阪国際空港就航都市を訪問させて頂いた際に、一番熱心に話を聞いて頂いた話題は、「大阪国際空港のターミナルビルを無料で使って頂けますよ。豊中・池田・伊丹の周辺３市を合わせて７０万の人口を擁している大阪国際空港のターミナルビルで、都市のＰＲをしてください」ということでした。例えば出雲市さんには、古事記１３００年祭のＰＲをして頂きましたし、物産展は様々なところにやって頂いています。本市の取組みとしては、例えば市内に大阪音楽大学がありますので、この９月１日にも音大さんに空港ビルでコンサートを開いて頂きます。また、市内に能楽師がお住まいになられているご縁で、全国から能面作品を公募し、能面展を実施して頂く。あるいは市美術協会に美術展を企画して頂く。こういったことで、随分、空港に人が集まります。先ほど戸崎先生からコミュニティの場としてというお話がありましが、市民の皆さんの活動などにも空港ビルを利用させて頂いています。内容によっては無料で、もしくは安価でご活用頂けるということで、就航都市の皆さんも随分ご関心を持たれたかなと思っております。

もう一点は、企業誘致についてです。豊中市は航路直下にございまして、移転跡地が、小さなところから大きなところまで２００カ所ほどあります。そこで国に対して地域再生計画を出させて頂き、また、企業立地促進条例をつくり、現在、ものづくり事業所の誘致をしようということで進めております。空港絡みで言いますと、物流と

いうことで、大正製薬さんなどにお越し頂くことになっています。たまたま移転跡地というものがあったということで、豊中は利便性高いですよ、色んなところがありますよ、というようなことをＰＲしながら、ものづくり事業所の誘致を進めておるという状況にございます。

○戸崎教授　　ありがとうございました。

それでは、最後のラウンドになりますが、伊丹市さんからご発言をお願いしたいと思います。

○藤原伊丹市市長　　大阪国際空港の地元市の一つであります伊丹市の市長の藤原保幸でございます。

今日、こうして、大阪国際空港と結ばれている全国の自治体の皆様方に集まって頂きまして、こうしたサミットを開催されること、非常に私は嬉しく、意義深いことだと思っております。これもひとえに淺利豊中市長さんをはじめ、豊中市の皆さん方がご尽力くださったおかげでありまして、私も地元の一員として、改めて淺利市長に感謝を申し上げたいと思います。

そして、先ほど来、色んなお話が出ております。私も申し上げたいことはいっぱいあるんですけれども、時間の関係もありますので、大きく２点を申し上げたいと思います。

ひとつは、こうして航空路で結ばれている相互の自治体どうしの連携と申しますか、交流と申しますか、その重要性ということについて申し上げたいと思います。と言いますのは、先ほど、名取市の佐々木市長さんから触れて頂きましたけど、私、全国民間空港関係市町村協議会の会長をさせて頂いております。全民協と略しておりますけれども、この団体、全国に９８ある空港の関係自治体で入ろうという方に入って頂いて、色んな活動をしてきました。これは昭和４０年代にでき、もう４０数年の活動実

績があるわけですが、こう申し上げるとちょっと語弊があるかもしれませんが、専ら、これまでは国にいろんな要望をする団体でありました。こういう空港を整備してほしいとか、環境対策をこうしてほしいとか、あるいは、空港周辺のまちづくりの財源として燃料譲与税はこうしてほしいとか、そういうことを中心にやってまいりました。もちろんそれも必要なことでありますけれども、これも皆さん方には釈迦に説法かもしれませんが、もう空港を新たに整備する時代ではなくて、活用する時代に入っております。そして、国交省の幹部の方がいらっしゃる前でこう申し上げるのも何ですけれども、全国９８の空港、どうすればいいかというのを国にお任せするというのは、もうそういう時代ではないだろうと、そんなふうに思っております。まさに地元が、地元の空港をどう活用していくのか、そしてそのために、主体的に汗をかかねばならない、そういう時代かなと思います。

先ほどのお話で、戸崎先生から、空港間競争の時代だというお話がありました。もちろんそれもありますが、それ以前に都市間競争の時代ではなかろうかと思っています。これから地方分権とか、地域主権とか色んな言い方をされていますけれども、これもまた言い方に語弊があるかもしれませんが、国の護送船団方式で国を頼りにする時代ではもうなくなってきて、全国各自治体がそれぞれの地域の良さを発揮して、自立して頑張っていく時代、それを一面から言えば競争の時代、そういうことかなと思うわけであります。そういう意味では、今日集まって頂きました全国の自治体の中でも、大阪国際空港と結ばれている自治体の皆さん方にも我々と同様に、空港という大きな社会インフラが身近なところにある自治体の皆さんでいらっしゃいますから、これを活用しない手はないかなと。その活用方法は我々が自ら知恵を出して、汗を出して、地域の人たちと一緒に考えていく。その際、先生もおっしゃいましたように、空港というのはスタンドアローンではあり得ませんから、結ばれている空港どうし、自治体どうしがお互いに意見交換し、どういうことをすればいいのか、これも霧島市の前田市長がおっしゃいましたけれども、総論だけじゃだめで、具体的に何をするのか

というのが今、問われている時代かなと思います。

先ほど奄美市の朝山市長さんから、２時間というお話をして頂きましたけれども、そうなんだなと、地理的には決して近いとは言えない奄美市なのかもしれませんけれども、時間的には非常に近い。伊丹市から考えますと、２時間では行けない県内の都市はいっぱいありますけれども、そういう意味では、今日お集まり頂きました航空ネットワークで結ばれている自治体の皆さんは、ある面、隣町ということでもありまして、震災のときの対応を含め、いろんな場合において連携し、空港を活用したまちづくりをともに進めていけるのではないだろうか、ということを申し上げたい。これが一点目になります。

もう一つ申し上げたいのは、これから、そうは言っても航空需要のパイを大きくしていくことを考えないと、これまたやっていけないのではないかということであります。これも戸崎先生から、エッセンシャル・エア・サービスについては国が税金で支えたらどうかといったようなご提案も頂き、私は、それも一つ重要な、離島なんかは必要なのかなと思うわけであります。私もこれまで空港関係でいろいろ考えてまいりました。そして、エアラインの方々といろんな意見を交換する中で、民間会社であるエアラインに、幾ら社会貢献をやれと言っても限界はあると感じました。そういたしますと、税金で支えるということも一つの考え方でありますが、航空需要のパイを大きくするということが何よりも大事。そして、その際には、行政の都合で利用者に押し付けるということでは、なかなか需要は付いてこない。利用者の視点で空港をどうすればいいか、どういうネットワークを張ればいいのかということを積極的に考えるべき時代かなと、そんなふうに思います。

そして、地元のことで申し訳ないんですけど、関西でもこういった議論が最近盛んにされております。ご案内のとおり、関西３空港と言いまして、私どもの大阪国際空港と関西国際空港と神戸空港、３つの空港があるわけでありますけれども、このうちの、国の関与が強い空港として、関空と大阪国際空港をどう使うのかというのが、こ

こ数年来、ずっと大きな課題となってまいりました。そして、国のほう、国土交通省では、関空の利用をとにかく伸ばそうということで、大阪国際空港に対して色んな規制を掛けられたりしたこともありました。結果として、なかなか厳しい状態が続いてきたというのは、先ほど大阪国際空港の利用者の推移であったところでありますが、私に言わせて頂ければ、関空か大阪国際空港かで関空を優先するという発想では、なかなかこれからの時代はうまくいかない。両空港を共に使って、航空需要のパイを大きくするということをまさに考えるべき時代ではなかろうか。誤解のないように申し上げておきますけれども、私、決して、関空をないがしろにしていいというつもりで言っているわけではありません。空港のグレード自体は関空のほうがずっと立派であります。長い滑走路が２本ありますし、２４時間運用可能ですし、西日本の国際玄関窓口として、関空は立派に成長してもらわねばならないという大前提に立っております。ただその際に、大阪国際空港も活用して、関空の支援というのができるんじゃなかろうかと考えています。関空も大阪国際空港もというようなことを主張してまいりまして、今回、国の方でも両空港の経営統合法というのをつくって頂きまして、この法律の目的で関空も大阪国際空港も使ってパイを大きくしましょうといったようなことを盛り込んで頂き、新会社ができました。社長さんにも関空を伸ばす、あわせて大阪国際空港も安全環境を前提として、その範囲内で積極的に活用しましょうということを言って頂いています。

先ほど、奄美市の朝山市長さんから、奄美―関空便を大阪国際空港便にしてもらったというお話をご紹介頂きましたけれども、これからの時代は、国交省さんのご判断も全く関係ないと言うつもりはありませんけれども、基本的には乗客の方の利便性を考え、エアラインが採算性を考え、空港会社がそれを認めるということに多分なっていくのだろうなと思います。そういう面で、今日お集まり頂きました皆様方、各地域で、それぞれの利用者の方の需要を的確に把握し、それをインスパイアすると言いますか、拡大する方向で考えて頂ければ、我々、空港所在都市の未来は明るいものがあ

るんじゃなかろうかと、そのために共に頑張りたいということを二点目に申し上げて、私のプレゼンテーションとさせて頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

では、次に、国東市さんからお願いいたします。

○川野国東市副市長　　大分空港のあります国東市からまいりました、副市長をしております川野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日、まず皆様に覚えて頂きたいのが、「国の東」と書きまして、クニサキと読みます。もし、よく分からなかったと言う方がおられましたら、決してコクトウ市ではございませんので、国東（クニサキ）市ということで、ぜひ、これを覚えて頂きたいと。これが今日の一つの大きな目標でございました。

大分空港がありますこの国東市ですけれども、実は、４町が合併いたしまして、今年で７年目になったところでございます。瀬戸内海に九州が丸く突き出た半島、国東半島ですけれども、その東側、ちょうど扇子を広げたような形の市になっています。この国東市というところは、明治以降、陸の孤島というような言われ方をされております。線路もありません。鉄道もありません。ただ、明治以降は陸の孤島であって、それ以前であれば、重要な瀬戸内交通の要所であったのではないかと思っております。実際に、国東市の国見町というところから、先日原発の建設問題がありました山口県の上関町の祝島というところまで、１，１００年ほど交流が続いた行事が行われております。４年に１回、国東から神舞という神楽を舞いに行くという、こういった交流も行っております。そういう意味では、非常に海上交通が発達したけれども、明治以降ちょっとさびれてきたのかなというところでございます。

大分空港ができまして今年で４１年ということで、これまで、キヤノンさんやソニーさん、これらの関連企業など、企業立地がございました。ただ、そうは言いまして

も、最近では企業誘致というのが、先ほども出ていますように、簡単にはいかない、この経済状況では難しいという状況でございます。そういう中で、人と人との交流というものを空港を通じてできないか、そして、ぜひ、国東市においで頂きたいと、こういう思いでございます。これは、空港が立地している市町村にとって同じような悩みじゃないかと思いますけれども、大分空港の場合、国東市の南の端にありますので、到着されたお客様はバスや車に乗って、大分市、別府市、それから湯布院、こういったところに向かわれます。５分も車に乗るともう市境を出て、市外に出て行ってしまいます。大分県という観光、交流全体として考えたときには、空の玄関という位置付けになりますけれども、市町村という自治体としては、大きな問題だと考えています。

そして、よく言われております空港を活かしたまちづくり、これは実を言うと、もう４０年来言われ続けた言葉です。けれども、先ほど前田市長さんがおっしゃったように、具体的にはよく分からない部分が多い。そうは言っても何もしないわけにいかない。まずは、この私どもの国東の地を知って頂きたい。１，３００年前から神様と仏様が一緒におられるこの国東の地でございます。田舎であるがゆえに、そういった文化が根付いてきている。神仏習合という形で、同じお寺の中に神社もあります。そして、この国東の地では、神様と仏様だけでなくて鬼も出てまいります。人に悪いことをする鬼ではなくて、無病息災をもたらす鬼がおります。そういう独特の文化を形成いたしております。そういったものをぜひ知って頂けたらと。逆に、知って頂くことによって、人に来て頂くことでまた、そういった来て頂いた方の地を知ると。お互いの交流というものができてくるということで、そういう関係が築いていけたらというふうに思っております。

今年の２月に豊中市さんと連携の協定を結ばせて頂きました。そのおかげを持ちまして、８月には豊中まつりに参加させて頂きました。そこに行くことによって初めて見えるもの、また、一人ひとりと顔を合わせることができると思っております。

また、今週の８月３１日からですけれども、今度は大分県ということで、そこの

「せんちゅうパル」で、大分竹物語というものに参加します。これは大分県の観光協会、ツーリズムおおいたというところがやっております。それと一緒に、またこちらの方に来させて頂こうということで、少しずつ、一人ずつ、一人ずつ、顔の見える関係というものを築いていけたらなと考えています。そして、大阪国際空港を通じて、この空港に就航している皆さん、ここにお集まりの各市長さんやスタッフの皆さん、お互いに顔を見ることによって、顔を突き合わせることによって、いろんな交流ができていく。観光だけではなくて、文化であったり、先ほど来話題になっている災害の関係、場合によれば企業の関係、大阪の中で１時間、２時間かかる、ラッシュで大変だというのを飛行機で行けばここから大分まで１時間で着きます。そういった時間の関係がどうなるのか、そういったものが、お互いに顔の見える関係になっていくことによって、空港を持つ地元の市町村にとって、お互いにメリットの出てくるものじゃないかなと思っておりますので、ぜひ皆様との交流を進めていきたいと思っております。

最後になりますが、明後日にはまたこちらの空港を使って新潟まで行く予定が入っております。そういった経由するというつながりというものも進めていけたらいいんじゃないかと、このように思っているところでございます。

ありがとうございました。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

では次に菊陽町さん、お願いいたします。

○松本菊陽町総務部長　　皆様、こんにちは。菊陽町の総務部長をしております松本と申します。本来は、町長が出席するところでございますが、今、滋賀県に出張しておりますので、代わりまして出席したところでございます。

今回の大阪国際空港就航都市サミット開催に当たりまして、豊中市さんをはじめ、

関係各位のご尽力に対しまして、心から敬意を表したいと思います。

菊陽町は、お手元の要覧の２５ページに掲げております。熊本市の東部に隣接しておりまして、タイトルに書いております、「人・緑　未来輝く生活都市　きくよう」ということで、生活都市でございます。観光都市ではございません。それから、下の方の写真をご覧頂きたいと思いますが、熊本空港は、「高知龍馬空港」のような愛称で言いますと、「阿蘇くまもと空港」と呼ばれております。先ほど、益城町さんが先にご紹介されましたが、手前の方が益城町さんで、滑走路部分のほとんどが菊陽町でございます。滑走路より北側が菊陽町のエリアということで、畑の基盤整備が碁盤の目のように終わっているというような状況でございます。

ちょっと話が遅れましたけど、このたびの７月１２日、九州北部豪雨大災害というのがございまして、この阿蘇地域においては死亡者もかなり出たところで、全国からお見舞い頂きまして、ありがとうございました。菊陽町も阿蘇から水が流れております白川という流域にありまして、若干の被害が出たところでございます。

熊本空港は、昭和４６年に開港し、昨年度で４０歳を迎えたというようなところで、年間３００万人の利用があります。役場から、今日空港まで出てきたんですけれども、９時半に空港を出る飛行機に乗るのに、８時４５分まで役場で仕事をしてきまして、空港に着いたのが９時５分頃ということで、非常に空港に近い町でございまして、かなり利便性がございます。

町では企業誘致に力を入れておりまして、ソニーセミコンダクタ九州さん、それから、富士フィルム九州さんといった大企業があります。熊本県がテクノポリス構想というのを昭和５９年頃に打ち出しまして、隣の益城町さんは、研究所の集積するテクノポリスセンターというのをお造りになりました。菊陽町はテクノ回廊ということで、住宅を充実させて、研究者が住まう町という位置づけで進めてきておりまして、例えば、ソニーさんには３交代の３，０００人の工場で立地して頂いております。近年は、大阪の方から、ナカヤマ精密さんという会社がこちらに進出されまして、空港がある

ということ、九州熊本の水、それから緑というようなこともありまして、全国からこちらにおいで頂いております。空港の機能というのは、目に見えない大きな力があるのではないかと考えております。

それから、町としてはそういう企業誘致のためにも、色んなインフラの整備を並行して進めておりますが、一方で中学３年生までは医療費無料の施策もやっております。そういった面、例えば工場が移転しても、従業員が子育てに心配がありますと、やはり人材が動きませんので、町といたしましても、子育てに心配のないようなまちづくりを進めております。

本町といたしましては、特に、今回のシンポジウムでは懸案はございませんが、就航路線を介した都市間交流につきましては、今後の産業観光振興や防災、災害時の応援などを見据えまして、まずは情報の共有や意見交換などに取り組ませて頂きたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

続きまして、豊岡市さん、お願いいたします。

○中川豊岡市副市長　　失礼します。コウノトリの住む町、兵庫県の豊岡市。豊中ではありません。たまに間違われます。豊岡市から参りました副市長の中川と申します。

今、豊岡では、やはり４番バッターは、先ほど申し上げましたコウノトリであります。コウノトリというのは非常に好奇心の強い鳥でありまして、全国各地、飛び回っております。北海道、それから東北の一部、岐阜県、九州の一部以外は、豊岡から出張いたしております。皆さんのところへも、もしコウノトリが飛来しましたら、よろしくお願い申し上げたいと思っています。

まず空港の紹介なんですけれども、参加都市要覧の１９ページに掲げておりますが、空港名は「コウノトリ但馬空港」といいまして、この頭のコウノトリというのは、実

は後から付け加えました。但馬豊岡から大阪国際空港まで、１日２便でありますけれども、実は兵庫県に設置して頂いた空港であります。年間の利用者というのは、皆さんのところとは違いまして、２万数千人から３万人程度ということであるわけですが、やはり必要性については、今までからお話が出ておりましたけれども、豊岡市にとってもぜひとも必要な空港だというふうに認識をいたしております。

その理由でありますけども、豊岡市も平成１７年に合併をいたしまして、それでも人口は８万６，０００人ぐらいであります。国勢調査のたびに人口も減少していまして、何とか地域の活力を底上げしたいというようなことから、特に豊岡市政の大きな柱の一つとして、大交流といったものを掲げています。それには、まず一つ目には、講演を頂きました先生は、非常に手厳しいことをおっしゃったわけですけれども、自分のところで住んでいるまちの魅力を高めるといったこと。これは当然だと思いますし、お越しになった観光客等の皆さんに対しても適切に、やはり住民が誰でも説明できるといったことが必要だろうと思います。二つ目には、その情報を首都圏であるとか、あるいは京阪神にきっちりと情報発信をするということ。三つ目が、それらの交流を支える基盤の整備、これらが必要かなというふうに思っておりまして、空港というのは、３番目の基盤整備に位置するものだということで、私どもも非常にここの部分は、これからも大事にしていきたいなというふうに思っているところであります。

内容についてはもうほとんど私の方も最後ですから、今までの発言であったわけでありますけれども、とにかく今考えておりますのは、大阪はもちろんありますが、ぜひ首都圏で豊岡の名前を売りたい。というのが、冒頭に豊中市ではありませんということを申し上げましたけれども、たまに視察にお見えになった時に、ごく稀ではありますが、豊中市さんというふうにおっしゃいまして、これはやっぱり知られてないんだな、これではいかんなということを常々思っております。ですから、まして首都圏で兵庫県の豊岡市という話をしてもなかなかピンと来てもらえないということがあって、ここはかなり重点的にＰＲを行っております。ここ３回ほど東京で定期的にアン

ケート調査をやっていますが、徐々にではありますけれども、豊岡の名前を知って頂いている、そういった状況であります。

それから大阪国際空港を介した就航都市間の交流、これも皆さんおっしゃいました、そのとおりだろうと思っています。それに関連して、今回は被災地からの出席の方も大変多いわけでありますけれども、実は豊岡市においても今まで宮城県のある町に職員の支援を行っておりました。そして今年の盆前に、１年５カ月経って現地の状況がどうか、あるいは今、被災地が求めておられる支援は何かというようなことを、職員数名派遣をして調査に行ってきました。やはり１年数カ月経つと、その支援の内容というのも随分大きく変わっておりまして、結論から申し上げますと、支援物資というのは基本的にはまず足りているといったことがあります。現在被災地が求めているのは、できるだけたくさんの方々に被災地の状況を見てほしい。そこからどういった支援ができるのかということをまず自身で考えてほしいということが一つ。それから、宮城県は比較的、海岸部の津波が多かったわけであります。観光と水産業というのが主産業であるわけですが、豊岡市においても水産加工品を販売してほしいという要請もありました。それらからすると、本日のこのサミット会議の中でも、そういったことをぜひ検討してはどうかなということを一言申し上げたいと思います。

以上です。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

では、隠岐の島町さん、お願いいたします。

○門脇隠岐の島町副町長　　島根県の隠岐の島から参りました副町長の門脇でございます。もうかなりお疲れと思いますが、少し聞いてください。

隠岐の島はですね、お手元の参加都市要覧でいくと２０ページに載っておりますが、まず、この字を読んでもらえないことから始まります。なかなかこれをオキと読んで

頂けません。それでも最近、マスコミのおかげで、隠岐の島と言いますと、ああ、海がきれいな島ですね、魚がおいしい島ですね、確か闘牛がありますよねと言って頂けます。後醍醐天皇が流されましたね、あるいは後鳥羽上皇が流されましたよねというふうに、幾らか分かってもらえておりますものの、ああ、分かってますよ、あの対馬の下の方の島でしょと言われます。いや、あそこは「壱岐」と言いまして「隠岐」じゃないんですよと、こういう説明をしながら、今日まで色々頑張っております。

そんな島ですが、人が住んでいる島が４つありまして、全部合わせても人口が２万２，０００ぐらいしかおりません。山陰海岸、北へ約７０キロのところに島々があります。本当に米粒ぐらいの島でございますが、歴史に大きな名を馳せた島でございますし、海産物あるいは文化、色んなものが特徴として皆さんに喜ばれております。

先ほど来から空港を持っている方々のお話を聞きますと、決定的な違いがありました。私の島、私の町よりも私の島の空港です。町ではなくて。島の空港ですから、どこかへ行くために隠岐空港を経由で行こうということはありません。ここが最後です。他の空港さんはどこかへ行くために、まず飛行機で大阪国際空港からあそこへ行って、あそこからＪＲに乗っていこうなどとなる。しかし、うちの島は、ここ経由はないわけです。大阪国際空港から来ても。そういう意味で非常に異なった、ある意味では、先ほどの国東半島にある大分空港もそれかもしれませんけれども、まだ大分空港さんの場合は、まず大分空港に降りて、宮崎に行こうやとかあり得ますが、私の島はそれはないわけでございまして、とにかく、片側通行の最果てでございます。

でも、町を元気づけるためのコンセプトは、観光を機軸にしたまちづくりでございます。だから、観光客の方々にたくさん来てもらうことで初めて町が成り立つ、島が成り立つという考えでございます。そうした中で、当然のことですが、ＪＲなんかございません。渡るためには船か飛行機しかないわけです。そういう意味では、国の配慮のおかげでかなり早く、昭和４０年代の初めから空港ができておりますが、悲しいかな、最初が１，０００メートル。それが１，５００メートルに拡張されましたけれ

ども、それではジェット機は飛ばない。ジェット機が飛ばないということは就航率が落ちるということで、観光客の皆さんにご迷惑が掛かるわけです。そういった意味で、つい８年ほど前に２，０００メートルの滑走路ができました。したがって、今はジェット機が入っております。ただ、季節運航でございまして、７月、８月の夏季限定となっております。

そうした中で、実は、そのジェット機が入る頃から、飛行機が大阪国際空港に降りるんだから、空港の近くの方々と交流すれば何かいいことがありはしないかと、わらにもすがるような思いで、豊中市役所の玄関を叩いたわけでございます。とにかく交流してほしいと。豊中市さんは４０万近い人口で、私の町とは桁違いですが、人と人が交わることはできるということで、今日まで色んな交流が始まっております。また、この交流を広げていくためには、私たちは何年も前から、今日のこういう場の実現を願っておりました。豊中市さんだけでなくて、豊中市さんを仲介役として、さらに他の空港とも結んで、広い交流をして観光客の方をお迎えしたいと、こういう思いでございますから、今日は本当に嬉しい思いで、ここに来ております。

今、豊中市さんといろんな交流をしております。７、８年になります。一番大きな交流は少年野球の交流です。最初は、私の町に豊中市さんから３、４チームの少年野球チームが来ていました。今は、岡山県とか鳥取県からも来ておりまして、島の４チームを含めて１６チームほどで少年野球の大会をしています。もちろん子どもたちは野球もしたいんですが、私の島で半日間、もう真っ黒になるまで海で泳ぐことが楽しいわけでございます。その後は、新鮮な魚でもってバーベキューをする。こういった交流がもう７、８年続きました。逆に、私どもの町のチームも豊中市さんのお世話になって、春の甲子園の時期に、豊中市の子どもたちと野球交流をし、１日だけはセンバツ大会を見せて頂いています。他にも女性の方々がバレーボールの交流として、隠岐から豊中に行く、また、豊中の皆さんに来て頂く、というふうな広がりも見られます。

次に物流でございますが、飛行機がいいのはとにかく早いんです。言い替えれば、私どもで朝捕れの魚がその日のうちの昼過ぎに豊中まで届きます。そのようなわけで、豊中市内のお魚屋さん、料理店等へと、今、飛行機の宅急便でこちらへ運んで喜んでもらっております。豊中まつりも、もう８年目になりますか。ご配慮頂いて、メイン舞台の近くで店を開いております。もう定番でございまして、大体、サザエを２日間で３００キロ売り尽くします。一番気の毒なのは、お客様です。暑い中、４０人、５０人並んで買って頂きます。ちなみに、サザエというのは、１キロ、普通のサザエで１０個から１３個ありますので、仮に１０個として、３００キロというと、３，０００個ぐらいのサザエを来場者の皆さんに食べて頂けることになり、それだけでも、生産者が喜ぶわけでございます。そういった交流を今後も継続していきたいなと思っています。

私どもは都市じゃございません。でも、田舎であってもこうやって皆さん方の力を借りて交流ができる、そのおかげでたくさんの方々に来て頂く。オーバーな表現ですが、７月、８月は恐らく豊中の市役所職員、あるいは商工会議所の方、あるいは市民の方、隠岐の島に誰かがいるぐらいに、観光客の方に来て頂いています。私、ここへ来るまでにちょっと長崎に行っていたので、２７日に隠岐を出ましたが、その時に、豊中の方が５、６名着きました。私の飛行機と一緒に大阪へ出た方が３名おられました。そのぐらいに、どなたかが隠岐の島に、この時期は観光に、魚釣りに来て頂いているというふうに思います。

それとですね、豊中市さんの紹介を受けて、伊丹市昆陽池での祭り、それから池田市の商業祭、こういったところにも、交流の絆をつくって頂きました。お祭りのときにはサザエとか岩ガキとか、あるいは海産物を持って出ておりまして、そういう事例を紹介しながら、私はこうしたことが必ず町の活性化につながるし、間違いでなかったと。今後はさらに、豊中市さんのお世話になって、今日ご参集の各空港の方々とお付合いをしながら、町の活性化につなげたい。これは物流の面でも、あるいは人流の

面でもそうしたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

最後になりましたけれども、池田市さんの方からお願いいたしたいと思います。

○小南池田市長　　大阪府の池田市でございます。

本当に最後ということで、時間も押しておりますので、簡単にご紹介をさせて頂きたいというふうに思うところでございます。

大阪府の池田市とあえて申し上げましたのは、この大阪国際空港の所在都市として３市ございます。豊中市さん、伊丹市さん、そして池田市ですね。その中で、ずっと皆様方のお話を伺っておりましたら、池田市が一番埋没しているんじゃないかな、このように思うところでございまして、もう少し池田市をＰＲしなきゃいけないかなと。大阪国際空港は昭和１４年に開設されました。池田市の市制施行も昭和１４年。大阪空港と共に歩んできたまちということも含めてお話をさせて頂きたいと思います。

全国で池田という市、町というのは、昭和６０年に７つありました。池田市が１市、あと６つの池田町がありました。この７自治体でサミット、全国池田サミットというものを開催させて頂き、平成１７年まで２１年間続きました。その中で、このローカル空港、空港路線ですね、この辺の問題が一番の問題でもあったわけでございます。

また、私どもの方で、今年が４回目になりますが、社会人落語の日本一決定戦というものを開催させて頂いております。北海道から奄美大島まで、学生を除いた社会人の方の日本一決定戦です。ちょうどこの９月８日に開催をするわけでございますけれども、選考を勝ち抜いた約３００名の方に池田に集まって頂きます。

ここへ来るまでに少し調べさせて頂きました。平成２１年６月現在と今年６月現在で、この大阪国際空港と路線がどういうふうに変化をしたのかということをです。６つの路線がなくなり、そして、１つの路線が新設された。差し引き５つの路線が減に

なった。

何を言いたいかと申しますと、先ほど言いました、池田市の中で色んな催しをさせて頂く際に、全国的な規模になってまいりますと、やはり何が必要かと申しましたら、飛行場と路線なんです。あちらの飛行場から大阪国際空港へ来て頂く。これがやはり一番の問題ではないだろうかなというふうに思うところでもございます。

同時に、大田区の川野部長さんがおっしゃったお話を、私はうらやましく伺っておりました。海外企業と国内企業とのマッチング、連携をさらに図っていかなければいけない。当然、大阪国際空港もそういう連携を図っていかなければいけないんです。いけないと言いながら、東京国際空港と大阪国際空港、どちらも国際空港という名前が付いているにも関わらず、大阪国際空港からは国際便が飛んでいない。ということは、先ほど申しました海外企業と国内企業との連携が非常にしにくい。この空港の活性化ということの中には、やはり企業の活性化ということ、特に関西企業、この北摂企業の活性化というものが必要なんです。

池田の地元企業の中でも、空港の近くに色んな支店や工場を出して頂いております。これもやはり、国内で動く場合も、この空港の近くに、行き来がすぐにできるところにその支店を出したい。これが池田市内の企業の考え方なんです。多くは、仙台空港を利用させて頂いておりますけれども、そういうことを含めまして、やはり、大阪国際空港から日本全国の空港へ飛んで行きたい。そして、国際便につきましても、何らかの国際企業、海外企業と地元企業との連携を図っていかなければいけない。こういうふうに改めて感じたところでございます。

以上でございます。

（拍　手）

○戸崎教授　　ありがとうございました。

当初は、皆様方に意見交換をして頂きたいと思っておりましたが、時間が過ぎておりますので、最後に淺利市長から、まとめのような形で、今お話が出ました就航都市

相互の情報共有、あるいは交流の促進、さらには、就航路線を介した地域住民や事業者等の交流促進について、ご発言を賜れたら幸いだと思います。

よろしくお願いします。

○淺利豊中市長　　様々なご意見、ありがとうございました。

特に、戸崎先生からございましたように、いかに就航都市の中でネットワークを作っていくか、しかも具体的にどういったことで進めていくことがいいのかということがございました。

門脇副町長さんがおっしゃったように、隠岐の島町さんとは随分、この数年間取り組みを進めておりました。その結果、豊中市民の中で、隠岐の島ファンができまして、必ず夏は旅行しますよ、もしくは豊中まつりの時にはお手伝いしますよ、こういった関係ができつつあります。こういったことが具体に進むということで、例えば私どもの豊中まつりや、それぞれの市町村におかれましても祭りがあるでしょうから、そういった場、あるいは私どもが豊中商工会議所と共に行っている産業フェアや農業祭もございます。こういったところに、就航都市の皆さんができる範囲でご参加を頂く。そのことによって、それぞれの地域に対するファンの市民がお互いにできてくる。そのことが、スポーツや文化を通じての交流にもつながるのかなというように思っております。先ほどご説明頂きましたように、この間、７市町村と友好都市提携、また３市町と災害時の相互応援に関する協定を結ばせて頂きました。そういった、お互いに電話一本で話ができる関係をつくる。そのことによって、今申し上げたような、それぞれの祭りや特徴のある取組みのところにお互いに参加ができることにつながるのかな、というように思っております。

もう一点、豊中市は高校野球発祥の地ということでＰＲをさせて頂いております。先日、岩手県大槌町の大槌高校の野球部の皆さんと、豊中市内にございます府立桜塚高校との交流試合をさせて頂きました。目的は、復興に向けてお互い頑張りましょう

ということでの取組みであったわけでございますが、会場となったローズ球場は、夏の甲子園大会の大阪府予選でも使われている球場でございます。今後、そこを使って就航都市の高校生や若者が交流できる機会があればいいなと考えております。

豊中市内には野球部を持つ８校の高校がございますので、こういったところとの交流試合を市でセットさせて頂く。調整ができれば、そのような取り組みを提案させて頂きたいと思っております。

これからは、自治体間の交流と同時に、市民レベルで交流を一歩一歩進めることができれば、ネットワークができて、お互いの力になると確信しております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

○戸崎教授　　ありがとうございました。

本日は、非常にすばらしいお話を伺い、お互いの理解が進んだのではないかと思います。また、関係者の皆さん、ここまでにして頂くのは大変な努力がおありだったことと思いますが、ぜひ、これをしっかりと定例化して頂いて、ご発言の中にもありましたように、ぜひ次回の会には、具体的な成果として、何らかの形でのご報告がなされるように、ぜひともお願いしたいというふうに考えております。どうもありがとうございました。

（拍　手）

それでは、司会進行を淺利市長さんにお返しします。

○淺利豊中市長　　どうもありがとうございました。

せっかく遠いところからお越し頂いて、ご発言の時間が少なくて、大変申し訳ございません。また、ご来場の皆様には、長時間にわたりまして、各自治体の取組みや思いについてお聞き頂き、ありがとうございました。

先ほど申し上げました産業フェアを、来たる１１月１７日に千里中央で開催する予定をしております。各市町村の皆様には、できれば、ご参加頂ければというように思っておりますし、高校野球の交流についても、ぜひ進めていきたいと思っております。

また、後日、アンケート等をお送りしますので、その中でのご意見につきましても、今後の取り組みの参考にいたしたいと思っております。

再度になりますが、ご参加を頂きました皆様方に感謝を申し上げまして、まとめとさせて頂きます。ありがとうございました。